

福島第一原子力発電所事故避難者のその後 ～農作業活動参加者の事例から～

畑 山 みさ子¹
遠 野 馨²
鈴 木 幸 子²

東日本大震災後に発生した東京電力福島第一原子力発電所爆発事故により、福島県沿岸部に住む人々は内陸部等への避難を余儀なくされた。郡山市も大勢の避難者を受け入れ、混乱状況の中で市民も避難者支援に当たった。それから7年が経過しようとする今、今後の支援のあり方を考える資料とするために、「ふくしま総合相談支援センター」が避難者支援活動として行ってきた農作業活動参加者の中から9名を対象に、現在の生活状況等について面接調査を行った。その事例を報告する。

Keywords：東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所爆発事故避難者、避難後の生活状況

I. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災では、福島県沿岸部の浜通り地方に住む16万人以上の人々が、津波の直接的被災ばかりでなく、東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故による放射能から逃れるために避難を余儀なくされ、その多くが福島県内陸部の中通り地方や会津地方に避難し、また県外へ避難した人も少なくなかった。原発事故から7年が経過しようとする現在も、原発周辺地域は依然として放射線量が高く、一部を除いて居住困難地域指定は解除されていない。故郷に戻れる見通しが立たないまま、避難先の災害公営住宅や戸建て住宅を求めて移り住む人も多く、それぞれが新しい生活を始めている。その一方で、福島県内の仮設住宅にはまだ12,000人以上（2017年12月福島県発表）の人々が暮らしており、いずれもそこでの生活は安定したものとは言えず、課題も山積している。

「特定非営利活動法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島」が運営する「ふくしま総合相談支援センター」が福島県避難者見守り活動支援

事業の一環として実施してきた避難者支援の農作業活動（畑山他，2014）も5年が経過した。この間に参加者の生活環境も大きく変化してきたことから、より良い支援のあり方を検討していくことが求められてきている。

II. 目的

原発事故避難者の現在の生活状況を把握し、今後の支援のあり方を考えていくための検討材料を得ることを目的に、農作業活動参加者の有志を対象に、この7年間の避難生活をふりかえりながら現在の生活状況等について簡単な聞き取り調査を行った。

III. 方法

2017年度の農作業活動登録参加者11名に、事前に文書で調査の趣旨を説明し、協力の了解が得られた9名を対象に、農作業活動日の午後の休憩時間に、著者の畑山が個別面接により聞き取りを行った。面接調査は、各人にこの年度内に2回行った。

1回目の調査は、2017年4月から6月に実施した。質問内容は、①避難後の転居状況、②今の生活環境での安定状況、③近所付き合いや、地域の方々との関わり、④気分が落ち込むことの有無、

1. 宮城学院女子大学名誉教授、宮城学院女子大学発達科学研究所客員研究員
2. 特定非営利活動法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島

および気を紛らすために行っていること、⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動、⑥郡山市で生活していくために必要な支援等、についてであった。

2回目の面接調査は、2017年11月または2018年1月に実施した。質問内容は、⑦最近の状況確認、⑧避難後に不快な思いをしたことの有無等であった。なお、⑧の質問については、参加者の精神面への配慮から、これまでの活動の中では極力触れないようにしてきた経緯があったが、1回目の面接時の印象から、このことをむしろ言いたい人もいるとの感触を得たため、あえて訊ねるようにした。面接所用時間は、1回15分から40分程度であった。

IV. 事例報告

8事例9人の状況について、できるだけ本人の言葉に即しながら、内容を要約して以下に述べる。

事例1 Sさん(60歳代 女性) 富岡町から避難

①避難後の転居状況:三春町の避難所に約1週間、郡山市内の避難所(高等学校)に2週間、県外の親戚宅に3ヵ月、郡山市内の避難所(ビッグパレット)に1ヵ月、郡山市内の仮設住宅に1年間居住した後、2014年7月から郡山市内に戸建て住宅を新築居住(現在)。

②現在の生活状況:新しい住居に移って間もなく、同居の母親が逝去。現在は一人暮らし。「母親が亡くなって、沈んでいたが、病院の医者やカウンセラーに励まされて、元気になった。くよくよしても始まらないと、気持ちを入れ替えた。今は大丈夫」

③近所付き合い:「隣の家の方は双葉町からの方で、その方とは話をする。町内会には入っている。順に班長をすることになって、早い方かと思っ手て手を挙げ、最初に班長を引き受けて、担当した」

④気分が落ち込むようなことは:「富岡町のことが気になっていて、自分で車を運転して行くこともできるが、一人で行くのはどうかと思っていたところ、先日いとこに誘われて、いとこの車で

富岡町に行ってきた。やはり…。でも『負けるなよ』と自分を言い聞かせて戻ってきた」

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動:「富岡町の『おだがいさま』、福祉センターのロココ、町内会の広報担当、コーラス・サークルなど。家の庭でも小さな畑で、野菜(ピーマン、トマト、ナス、オクラなど)を作っている」

⑥郡山で生活していくために必要な支援等:「母親の遺産もあり、金銭面では生活に特に不自由はない。こうしてみんなで農作業ができるのがうれしい」

⑦最近の状況:初回面接時から特に変化はない。

⑧避難後に不快な思いをしたことは:「郡山では、嫌なことはない。いわきにいる人から聞いた話だが、ゴミ捨てが一緒に隣の家に、挨拶回りをして手ぬぐいを配ったが、翌日それらが全部玄関前に置いてあったという。別の地域では、地域のサークル活動の中で嫌みを言われたそうだ」

【面接時の印象】初回面接時には、やや高揚気味に早口でしゃべり、自分を奮い立たせているように見受けられた。2回目の面接時には、かなり落ち着いてきたように思われた。

事例2 Tさん(60歳代 女性) 双葉町から避難

①避難後の転居状況:双葉町福祉センターに1晩、郡山市安積町の親戚宅に1週間、千葉市の娘の家に3ヵ月、福島市の長男の家に1年間、福島市の仮設住宅に3年間、2015年から郡山市内の復興公営住宅の上階に(現在)。

②現在の生活状況:夫は震災前に死去し、現在一人暮らし。

「仮設住宅にいた時の方が良かった。隣近所、声をかけやすく、皆で集まり顔をあわせることが多かった。今はドアを閉めれば、その家の様子は全く分からない」

「元は農家で、次男は2年間は父親と一緒に農業をしていた。震災で農業ができなくなり、次男は郡山でコインランドリーを2店開いた。そのうちの1店の掃除を担当している。掃除をしていると、お客から『お世話になっています』と挨拶さ

れるのがうれしい」

③近所付き合い:「隣は一人暮らしの男性。初め、声を掛けたりしていたが、人柄が分かり、付き合いを避けるようにしている。その男性から会合に誘われたこともあったが、断った。同じ団地に、富岡から来た入れ墨をしている一家もいて、入れ墨を隠すこともしていない。そのような人とは付き合いたくないなので、避けている。双葉町から来た4・5人とだけ付き合うようにしている」

④気分が落ち込むようなことは:「今はない。でも、夜はさみしい」

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動:「B温泉のプールに週何回か通い、社協のロココにも行っている。息子が経営しているコインランドリー店の掃除を、1日おきに行っている」

⑥郡山で生活していくために必要な支援等:「この農作業に来ている人は、皆いい人ばかりで、作業も楽しい。他には特に希望することはない」

⑦最近の状況:「公営住宅に住む4人(大熊町2人、双葉町2人)が友達になって、よく会っている。今は充実しているのかな…」

⑧避難後に不快な思いをしたことは:「福島市にいた時は、気をまぎらすために、回転すし店などの洗い物のアルバイトをしたことがあるが、『金ももらっているのに、何で働くんだ。お前らは働かなくてもいいだろ』などと意地悪な言葉を投げかけられ、仕事も教えてもらえないなど、いやがらせを受けて辞めた。新聞配達ではそのようなことはなく、双葉と檜葉の避難者分を担当していた。福島の人には怖い。郡山では、そのようなことはない。この農作業には、Zさんに誘われて参加した。楽しい」

【面接時の印象】 避難先で直接向けられた心無い言動に不快な思いをし、それが現在も強く記憶に残っていることが伺えた。

事例3 Uさん(60歳代 女性) 大熊町から避難

①避難後の転居状況:三春町の避難所に3日間、大熊町からの指示で喜多方の旅館に半年間、郡山

市の借り上げ住宅(アパート)に3年半、2015年4月同市内の中古戸建て住宅を購入し転居(現在)。

②現在の生活状況:夫と二人暮らし。「避難先の喜多方の旅館では、1家族1部屋ずつ割り当てられ、10人ほどがそこに滞在。3食と風呂も提供され、恵まれていたと思う。しかし夫は大熊町に生まれ育って、大熊町を離れて暮らすのは初めてであり、雪深い山村ですることがなく、落ち込み、心配な状況になり、心療内科に通う事態になった。最近やっと落ち着き、つりに行くなどし始めた。それで自分も安心できるようになった」

③近所付き合い:「町内会には入っている。昔からの住宅地で、空き家が多く、近所でも空き家が8軒ある。住んでいる人も老夫婦が多い。付き合いは、隣の一人暮らしのおばあちゃんのみ。その方は90歳位だが、元気で、班長さんも引き受けてやってくれている。その方のみが、声を掛けてくれる」

④気分が落ち込むようなことは:「夫は、『帰れないのは分かっているけれど、でも帰りたい』と言っている。自分は何とか大丈夫。この農作業に参加している人は皆いい人ばかりで楽しく参加している」

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動:「郡山市内で開かれている大熊町のサロンに参加している。会計係を担当。以前は月4回開かれていたけれど、今は月2回の開催。大熊町にはお墓もあるし、大熊からの情報を得たいから、住民票は残したまま。郡山市民ではないから、市の行事などには余り参加していない」

⑥郡山で生活していくために必要な支援等:「このような状況に声を挙げられるのは、若い人のみ。年寄はじっと我慢し、耐えている」。(2回目の面接時には)「今は、特に必要な支援はない。こちらの人と皆で楽しくやれば、それで良いと思っている」

⑦最近の状況:「昔の同僚などがいろいろ心配して声を掛けてくれ、ありがたかった。何のお返しもできずに心苦しく思っている。12月に、仙台市男女共同参画推進センターからの調査依頼に

応じ、避難後のことについていろいろ話をしてきた。避難者自身が話さないと他の人たちは分かってくれない。原発の再稼働はあってはならない。避難者が声に出さないと」

⑧避難後に不快な思いをしたことは：「こちらの人とは余り付き合いがないので、特に嫌な事を言われたこともない。いわきではあると聞く」

【面接時の印象】 初回面接時には、話し始めると同時に涙を流し、その後も泣きながら話を続けた。辛い場合には話さなくて良いと言ったが、当人は「話したい」と続けた。自分達の置かれている状況を理解してほしいとの思いが強くと受け止めた。初回面接以降、避難後のことを仙台市男女共同参画推進センターでも話をして来るなど、積極的に振る舞うようになり、2回目の面接時には、以前より明るい表情で昔のことなどいろいろ話してくれた。

事例4 Vさん（70歳代 女性） 富岡町から避難

①避難後の転居状況：本宮市の避難所に2ヵ月、いわき市の親戚の借家に2年間、2014年3月から郡山市の団地の戸建て住宅に（現在）。

②現在の生活状況：夫、実母と同居。向いの家に息子家族が住んでいる。

「富岡では、敷地内に店と母屋と年寄の家と3軒が建ち、ゆったり暮らしていた。夫には、家族が狭い場所に枕をならべて寝起きする避難所生活には堪えられなかったようで、うつ状態になり、一時期心配したが、今は元気になった。私は、不自由なことはないが…。

母は、外には出ないし、近所付き合いもない。母は、震災以前のことは覚えているが、その後のことは分からない様子。『どうしてここにいるの?』と何度も聞く。私をいつまでも子ども扱いし、出掛ける時には、『帽子を持った? ハンカチは?』などと繰り返し聞く。

自営業の息子は、店を失い、今は役場の臨時職員。しかしそれも間もなく終わる。その後どうするかと本人は悩んでいる。息子の子どもは大学生と高校生で、子どもたちが学校を終えるまでは、

働かなければならない。ストレスがたまっている様子」

③近所付き合い：「隣家と付き合いのみ。団地の集まりはあるが、若い人は来ない。今、夫は町内会の役員をしている」

④気分が落ち込むようなこと：「自分自身のことでは、心配なことは特にない。息子のことが心配」

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動：この農作業グループの手芸品作りに参加している。

⑥郡山で生活していくために必要な支援等：「この農作業体験活動には、同郷の知り合いのAさんに誘われて参加。この農作業があって、本当に良かった。自分はこれで十分。家のことも心配なので、2・3日続けて家を空ける活動には参加できない」

⑦最近の状況：「元気だった実弟が癌で入院、余命3ヵ月と宣言された。原発事故後も禁止区域の南相馬の事務所に通っていた。原発の影響かねえ…」

⑧避難後に不快な思いをしたことは：「いやな思いをしたことはない。いわき市では大変と聞く。不登校が多いという。親戚の子どもも不登校」

【面接時の印象】 元々明るい性格のようで、現在の家族の状況などを屈託なく話してくれた。

事例5 Wさん（70歳代 女性） 富岡町から避難

①避難後の転居状況：川内村の避難所に4日間、郡山市の避難所（ビッグパレット）に2ヵ月間、同市内の借り上げ住宅のアパートに2年間、2013年7月から同市内の戸建て住宅に（現在）。

②現在の生活状況：2014年に夫が逝去。現在下の息子と二人暮らし。「今の生活環境で特に不自由なことはない。富岡のことを考えても仕方がないので、考えないことにしている。もう自分は郡山の人間と考えることにした。郡山は東京からも近いし、東京に住む娘もこちらに来るのに便利だからいいと言っている」

③近所付き合い：「現在の住宅地には、20軒ほ

どが建っている。近くの人とは挨拶をする程度。郡山の町内会には入っている。富岡町からの広報は届く」

④気分が落ち込むようなことは:「今は落ち着いてきたと思う」

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動:「ない。この活動に参加するのみ」

⑥郡山で生活していくために必要な支援等:「農作業をするのは、この活動に参加して、初めてのこと。畑作業は楽しいし、気持ちが良いので続けたい」

⑦最近の状況:特に変わったことはない。

⑧避難後に不快な思いをしたことは:ない。

【面接時の印象】 笑顔で、淡々と短い言葉で、通り一遍の受け答えであった。畑作業活動中も、口数は少ないが、積極的に参加している様子が見られる。

事例6 Xさん(70歳代 女性) 大熊町から避難

①避難後の転居状況:田村町の小学校に1日、同町の体育館に1ヵ月、会津若松市の裏磐梯の避難所に3ヵ月、郡山市の借り上げ住宅に2年8ヵ月、2014年4月から郡山市内の分譲住宅に(現在)。

②現在の生活状況:夫婦二人暮らし。夫は避難後に軽い脳梗塞を起こした。娘二人は、県外在住。「今の住宅地には、地元郡山の人と移転してきた人が半々位で暮らしており、ここでの生活にも慣れてはきた」

③近所付き合い:「地元の人とは避難の話はしないようにしている。隣に双葉町から避難して来た人がいる。その人とは避難の話はしている」

④気分が落ち込むようなことは:「大熊町の家の問題が進んでいない。そのことを考えるとつらい。夜眠れず、薬に頼っている。1日何も手につかないこともある。外に出掛ければ、忘れることがある」

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動:「月2回、双葉町の人集まりがある。そこで2回に1回はストレッチなどをしている」

⑥郡山で生活していくために必要な支援等:「夫

は現在、後遺症はないが、外に出たがらず、家に閉じこもっている状態。体を動かすようなことがあると良いのだが…。いろいろ誘っても外出しようとしらない」

⑦最近の状況:「夫は、通院はしているが、大分良くなってきた」

⑧避難後に不快な思いをしたことは:「引っ越して1週間位して、近所の人から言われたことがあった。日赤から荷物が届いたり、いろいろな荷物がよく届くので、『どこ?』と聞かれたり、『アパートもタダで借りられて、いいね』と言われたりした。近所の人とは顔を合わせないようにして、家にこもっていた。昼は外に出ないで、買い物も夜にしていた。補償問題が新聞に出るようになって、『お金もらってるでしょ』と言われた。お金のことを言われるのが一番つらかった。避難者同士が集まっても、そのことが話題になっていた。今は開き直って、町内会にも参加するようにしている。高齢者の弁当作りなどにも参加している。今まで知らなかった人と友達になって、楽しい」

【面接時の印象】 本活動では、同じ町からの避難者と一緒に行動することが多かったが、最近では本人の単独参加も増え、秋には笑顔も多く見られるようになった。

事例7 Yさん(60歳代 女性) 富岡町から避難 (本事例の当初の状況は、畑山他, 2014に記載)

①避難後の転居状況:川内村の小学校に4日間、郡山市の避難所(ビッグパレット)に半年間、2011年9月から同市の仮設住宅(2018年3月までの予定)。2015年にいわき市に戸建て住宅を新築し、夫はそこに居住。

②現在の生活状況:富岡町では、寝たきりの姑の介護の傍ら、農作業をして暮らしていた。姑は原発事故後特別養護老人ホームに入所して、その1ヵ月後に亡くなった。本人の喪失感は大きく、体調も優れない状態が続いたが、その中で本農作業活動に参加するようになって、徐々に元気を取り戻した。現在、郡山市内の専門学校に通う次男

と二人暮らし。夫は車でいわき市と郡山市を往来している。

「今の仮設住宅での生活は6年になり、不自由はない」。当初316世帯が暮らしていた仮設住宅の入居者も今年度初めには30世帯ほどに減った。「この3月には息子が卒業して就職するので、それに合わせて今の仮設住宅を出て、いわき市に移る予定。その時点で住宅の支援も精神的慰謝料の支援も終わることになる」

③近所付き合い：「週3回午前中、自分が世話役になって仮設住宅の集会所でお茶会を開いている。毎回5～10人が参加している」

④気分が落ち込むようなことは：「富岡には帰りたいが、帰れない。もう家も取り壊したし…」

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動：本センターの吊るし飾りワークショップに参加している。

⑥今後の生活に必要な支援等：「郡山にも住みたいと思うが、いわき市に行くしかない。いわき市には娘家族もいるし…。農作業には参加したいが、いわき市に行ったら、参加するには郡山に前泊するしかない」

⑦最近の状況：「仮設住宅の利用期限は1年延び、希望すれば2018年度一杯居られることになった。2018年1月時点で20世帯が残るのみ。自分の居住先は、息子の就職先の場所によって決める」

⑧避難後に不快な思いをしたことは：特にない。

【面接時の印象】 農作業には欠かさず参加しているが、最近では、一時期ほどの快活さが感じられない。今後の新たな環境での生活に不安を抱いている様子が伺えた。

事例8 Zさん夫妻（80歳代女性、80歳代男性）
双葉町から避難（本事例の当初の状況は、畑山他、2014に記載）

①避難後の転居状況：浪江町の小学校に4日間、二本松市の体育館に10日間、東京の親戚宅に3ヵ月、郡山市の借り上げ住宅（アパート）に3年、2014年から同市内の分譲マンションに（現在）。

②現在の生活状況：夫婦二人暮らし。農業中心の平穏な生活は、原発事故により全て失われ、生活は一変。夫はすることがなく、太り体調を崩すことが多かった。この農作業活動に参加するようになって、二人とも体調は回復した。しかし妻は2016年に転倒して脚を捻挫、2017年にはペースメーカーの手術をするなど、健康に不安を抱えながらも、この農作業活動には積極的に参加している。

「夫は農作業のような行事があれば外出するが、ない時にはすることがなく、ほとんど横になっていることが多い。耳も遠くなってきて、会話が難しい」と妻は言う。

「次女は震災後に心身が不安定な状況になり、夫とは別居している。郡山市内の借上げ住宅のアパートでは、その次女と一緒に三人で生活したが、現在の高層マンションでは心配なため、次女は別居。東京に住む長女が心配して、次女と住むことのできる住宅を建てるようにと言っている。来年また転居することになると思う」

③近所付き合い：少ない。「マンションに慣れてきたが、また移らなければならない」と、夫は不安を口にしていた。

④気分が落ち込むようなことは：「次女のことが心配」と、妻は涙を流した。

⑤この農作業体験活動以外に、継続的に参加している活動：「双葉町社協が毎週水曜日に行っている体操（1時間半～2時間）に参加している。20人位参加している」

⑥郡山で生活していくために必要な支援等：「今の農作業がとても良い。この活動でとても助かっている。ぜひ続けてほしい」

⑦最近の状況：新築予定の家のことで、混乱している様子。「C住宅会社が混んでいて対応できないと言われて、D代理店に頼んだ。東京にいる長女夫婦がすべてネットで依頼して進めた。自分達は言われるままに、お金だけ振り込んだ。初めに1,190万円を振り込んだ。その他に担当者が来て、必要だと言われて車に乗せられて農協に連れて行かれ、200万円、80万円、85万円など、5回

ほど通帳から引き出されて支払った。カーテン業者や引越し業者にも頼んだ。しかし引越し予定の12月になっても、土地は更地のままで、基礎すら出来ていない。D代理店の担当者に言っても、ああ言えばこう言うのぬらりくらりで、話にならない。2,000万円近くがだまし取られた」。長女らが弁護士に頼んで、初めの1,190万円は返ることになったと12月末に連絡があったが、後で振り込んだお金は戻って来ないとのこと。夫は「詐欺に遇ったんだ…」と。

⑧避難後に不快な思いをしたことは：「いわき市に行った人が言われたという避難者に対するいやみを、郡山では言われたことはない」。しかし、自分達が詐欺被害に遇ったことに最も憤りを感じていることは間違いない状況であった。

【面接時の印象】二人とも穏やかな性格で、仲のよい夫婦。本農業活動は、当人達の要望を受けて開始した経緯がある。夫婦は、農業でも積極的に働き、この活動を真に楽しんでいる様子が伺える。面接ではほとんど妻一人が話し、夫は耳が遠いせいもあって、時折あいづちを打つだけであった。妻は話し始めると次々に関連事項に触れて話し、感極まって涙を流すことも多かった。2回目の面接では、詐欺に遭ったことを、憤まんやる方ない様子で話した。今後の状況推移を見守る必要があると思われる。

V. 考察

上述の8事例9名は、東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故からの大勢の避難者、富岡町、双葉町、大熊町から避難者の中のごく一部の例にしか過ぎない。全員が60歳以上の元気な高齢者である。しかし、その夫や家族は必ずしも元気とは言えず、事故避難による環境の大きな変化に対応できずに心身の病を患い、またその影響を引きずって生活していると思われる例が半数あり、単身生活者も3例ある。そのような状況の中でも、自分を奮い立たせ、頑張っている姿が、面接場面からも伺い知ることができた。調査協力者9名全員が本農業活動を楽しみに参加してお

り、澄んだ空気の下で土に触れ、野菜の成長を喜び、その収穫を楽しむなど、和気あいあいとした雰囲気の中でのこのような集団活動は、被災者の心を癒す心理社会的効果が大きいと実感できる。避難者がそれぞれの地域に落ち着き、心穏やかに生活できるようになるまで、もうしばらくの間、この農業活動を継続実施していく必要があると考えている。

今回の面接調査協力者の中に、詐欺被害に遭った方もいる。東京電力からの補償金を受け取った高齢避難者を狙ったこの種の被害が多発していると聞く。このような社会の現状を直視し、高齢者を守る手立てを更に考えていかなければならないと痛感している。

参考文献

- 1) 畑山みさ子, 遠野馨, 清水道子, 鈴木幸子, 星依子, 平井里香, 安達礼子, 秋元里美 2014 東日本大震災による福島第一原子力発電所事故からの避難者への農業活動支援の実践とその心理社会的効果 宮城学院女子大学発達科学研究, 14, 31-40
- 2) 畑山みさ子, 遠野馨, 鈴木幸子 2016 福島第一原子力発電所爆発事故避難者への支援活動～「特定非営利活動法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島」の5年間の活動記録～ 宮城学院女子大学発達科学研究, 16, 23-31
- 3) ケア宮城, ブラン・ジャパン 2012 被災者の心を支えるために―地域で支援活動をする人の心得―
- 4) 矢永由里子 2016 支援者のためのサポートガイド 風間書房
- 5) WHO (国立精神・神経医療研究センター監訳) 2012 心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド:PFA) フィールドガイド